

対話について

大岡信氏が、『展望』の昨年九月号の「現代芸術批判」というエッセイのなかで、

今日われわれが感じている不安や不満の根源をさぐっていけば、言葉が今日ほどおとしめられ、無力化している時代はかつてなかったのではなからうか、という、それ自体大層不安な疑問に突き当るのは必定だと思われる。

といている。言葉の無力化ということは、別に新しい問題というわけではないが、こんにちの時点において、改めてこの問題が取り上げられたことに、新しい意味を見いだしたいと思う。

とはいっても、われわれの用いるすべての言葉が無力化したというのではない。たとえば、ペンとか原稿用紙とかタバコとか時計とかの個物を指示する言葉が無力化することはありえないので、無力化したのは、「人間がその精神の全面的な共鳴のもとに他者と関係を結ぼうとするとき、その関係を指示する言葉」のグループであって、個人対個人、個人対集団、個人対社会秩序、

個人対理念———そういう関係を指示する言葉（たとえば「平和」など）がいちじるしく力を失ってきたところに現代の病根がある、と大岡氏は言おうとするのだ。

しかも、このような関係を示す言葉の無力化は、言葉そのものの変質や頽廢によるものではなく、同じ言葉を用いて語ろうとするとき、一人一人がそこで意味しようとする観念がたがいに異なっているために、その言葉が幾様にも解釈され、あるいは誤解される可能性のなかで、孤独に相手に向かって発せられることによる、ともいつている。

大岡氏の所論をながながと紹介したのは、こんにちすでに流行語にすらなつた観のある「対話」という言葉の真意と、それに託されたひとびとの願望の根拠について考えようとするとき、大岡氏が指摘した言葉の無力化という事態の客観的認知を避けて通ることができないという事情からであった。言葉の空しい一方交通による孤独の不安が、精神の全面的な共鳴のもとに相手と関係、を結ぼうとする切実な願望を、「対話」という言葉に託しているのかも知れない。そうだとすれば、ここで「対話とは何か」という問いが、言葉の教育とその研究にたずさわる者によって発せられることが喫緊のこととなってくる。そしてその問いに対する答えは、われわれ一人一人が用意しなければならぬ。

その場合、ギリシヤの哲人の高い知恵に学ぶことももちろん必要であろうが、わが古代王朝に極限にまで発達した対詠（贈答歌）の成立の根拠に省察の眼を向けることによって、重要な手がかりが得られることを指摘しておきたい。

（四二・一一）